

能の敵討ち物における「本望」

伊海孝充

十五世紀前半に書写された『義貞軍記』は、新田義貞に仮託された人物が武士としての心構えや戦における戦術などを説いている武家教訓書の一つである。この書は武士に必要な教訓を軍記物語を引用しながら説明しているが、『曾我物語』についても次のように言及している。

一親ノ敵ヲ可討用意事。

曾我十郎。五郎。本望ヲ遂上ハ。誠ニ高名至極ナレバ聊其難ナシ。但後輩是ヲ不可学カト覚。彼面々ハ運人ニ勝タルニ依テ挙名也。若成人之後如此送年。イカナル横死ニモ逢ナバ永本意ヲ空クシ。家ノ疵ヲモ可付。唯親ノ敵ヲバ不可有遁避。機嫌ヲモ不可計。即時ニ押寄テ可決勝負。敵運命尽ナバ本望ヲ遂ベシ。敵運アラバ我命ヲ捨タラン事達又トスベキ也。去バ本文ニハ親ノ敵ニハ足ヲ後ハ踏事ナカレト。親ノ敵ヲ持者ハ日光ニ不当ト云リ。

〔群書類従第二十三輯 武家部所収『義貞記』〕

このように「高名至極」と兄弟の行いを称えながらも、「即時ニ押寄テ可決勝負」とすぐに敵

討ちを実行することを是とし、曾我兄弟のような幾年もかけて達成された敵討ちのことは「後輩是ヲ不可学カト覚」と評している。

武家教訓書の『義貞軍記』は、いかに敵討ちが達せられるべきかという点を重視しているが、そのように『曾我物語』の世界ですぐに宿願が叶ってしまうと物語自体が成立しないだろう。というのも、『曾我物語』の眼目は兄弟の武略・知略や敵の工藤祐経を討つ瞬間を描くことにあるわけではなく、多くの不運・苦難に遭いながらも、様々な人々の情愛に触れつつ苦境を乗り越えていこうとする時間を語ることに大切だからである。この時間が兄弟の強固な願望を育て、それを投影する数々の名場面を作り上げているのである。

そのことは芸能作品を見れば明らかである。能だけでなく諸芸能の曾我物は敵を討つ場面を描いたものは僅少で、それを遂げるために辛苦を重ねる兄弟の姿にスポットを当てた作品が大半である。芸能の曾我物が下敷きにされた(もしくは創出した)伝承は、どのよう

に敵討ちへの思いを募らせているかという点にこそ眼目があるといえる。

『義貞軍記』でも曾我兄弟が敵討ちを果たしたことを「本望ヲ遂ぐ(傍線部)」と評しているように、能の曾我物でも彼らが募らせた思いは「本望」と表現されている。例えば永享四年(一四三二)に伏見宮御所で矢田猿樂が演能した記録があり、曾我物の中でも古い成立であったと考えられる「元服曾我」には四回も「本望」という語が使われている(以下東京大学資料編所蔵観世元頼節付本に適宜漢字・濁点・読点を補う)。

①かものを男になし、諸共に本望を達せばやと思ひ：(一段「名ノリ」)

②いとけなくして父を討たせ、その本望をば遂げずして。なをありがひなき身と成(五段「サシ」)

③思ふも憂し命の惜しからぬ身なれども、本望を遂ぐまでと、たのむたよりや兄弟主従ともに(六段「クセ」)

④いで〜元服祝はんとて、別当に伝はる重代の太刀、伊豆権現の力を添へ、思ふ本望遂げ給へと：(七段「問答」)

この曲は箱根で僧の修行をしていた箱王が、父の敵討ちを果たすために、元服をするという内容だが、その箱王を兄の十郎祐成が迎えに来る曲冒頭①、元服し祝宴となる終曲部に②、そして兄弟の運命の不遇と箱王の元服へのささやかな喜びを綴ったサシとクセ③④と、曲の所要所に「本望」という言葉を配している。曾我兄弟はこの「本望を遂ぐ」と

いう思いに突き動かされるがごとく、箱根を後にするのである。

「本望」が兄弟の覚悟と紐帯関係にあるのは「元服曾我」だけではなく、他の能の曾我物にも当てはまる。曾我物の現行曲は五曲あるが、「小袖曾我」「調伏曾我」にもこの言葉が効果的に使われており、番外曲にも目を向けると、富士の麓・井出の里に訪れた虎のもとに十郎の幽霊が現れるといった内容で、寛正六年（一四六五）に観世による演能記録がある「伏木曾我」をはじめとして、「和田酒盛」「祝子曾我」「赤澤曾我」など多くの作品にも「本望」という言葉が使われている。

さらに、「本望」は能の曾我物に多く見られるという点ではなく、敵討ち物のみに使われているという点が重要である。管見に入つた限り、他の現行曲には「望月」に見られるのみで、番外曲まで広げても観世信光作の「二人神子」や室町時代後期には成立していた「吉備津宮」といった敵討ち物で、親子の執念が「本望」と表現されているのみである。現在は「くができれば本望である」のように強い願望、もしくは「くができて本望だ」のように望みが達せられた喜びを表現する言葉として比較的よく耳にするが、能ではそのような用例はなく、「敵討ちの達成」といった限定的な使用例にとどまっている。すなわち、「本望」という言葉、もしくは「本望を遂ぐ」という表現は能において敵討ち物を象徴する語句となっているのである。

ではなぜ能は曾我兄弟の敵討ちへの並々ならぬ執念を表すのに「本望」という言葉を用いたのだろうか。『日葡辞書』の用例に「本望を遂ぐる、または達する」と載っているように、そもそも「本望」は「遂ぐ」と結びつき広く流布していた表現であるが、その理由としてまず考えられるのは、本説たる曾我伝承がそれを「本望」と表現していたためである。しかし『曾我物語』の真名本・仮名本それぞれの本文を精査してみると、兄弟の思いは「本望」ではなく、ほぼすべて「本意」と表現されているのである。例えば十郎が虎に敵討ちの宿願を伝える場面では、次のようになっている。

【真名本】助成が身に思ひあるぞとは年来知り給ふらむ。その本意を遂げばやと思ひて、御友をしつつ、明日打出でなん後はまた再びこの古郷へ返るべからず。（巻第六。東洋文庫『曾我物語 真名本』に拠る）

【仮名本】年ごろ、祐成が身に思ひ有とは知り給ひぬ覧。その本意をとげんと思へば、此度出でて後、二度返るまじければ、あひみん事も、今宵計也。（巻第六。日本古典文学大系『曾我物語』に拠る）

このように両本とも表現が少し異なるが、十郎の思いを「本意」としている点は一致している。この箇所だけではなく、『曾我物語』には曾我兄弟の宿願を「本望」と表現する箇所はなく、真名本の「宿意」一例を除くと、すべて「本意」なのである（仮名本には北条の館を出る源

頼朝の誓願の中に「長く本望を遂げしめ給へ」という表現はある）。

「本望」も「本意」も辞書上の意味としては大差がないので、どちらの言葉を使っても作品世界が大きく変わることもないかもしれない。ただし能と『曾我物語』との関係を考えるとき、この小異も重要である。能の曾我物の成立に関する研究では、本文の一致箇所を検討し、まず『曾我物語』との距離を測ることが常套手段になっている。能が『曾我物語』のテキスト自体に拠っているかについては諸説あるが、先行研究の中で真名本か仮名本との親近性が指摘されている曲もある。しかし、能の曾我物において曲の主題に関わるような重要な言葉に差異があるという点は、能の曾我物の成立を考える上で考慮すべきであろう。しかも「本意を遂げる」という表現は『平家物語』『源平盛衰記』『太平記』『義経記』などに多くの用例が見られるが、「本望を遂ぐ」という用例は僅少であり、これが散見できるのは幸若舞曲の曾我物なのである。この用例数は各作品の諸本を網羅的に調査する必要があるが、「本望」と「本意」の使用分布状況に能の曾我物を置くことで、この曲の成立背景を解明する手掛かりが得られるのではないだろうか。また、能作者が『曾我物語』のテキストに拠りながら曾我物を作っていたとしたら、なぜ「本望」という言葉を選択したのかを考えることが、この曲種の特質の新解釈につながると思われる。（法政大学准教授）